

友人・知人各位

紫陽花の花が風に揺れる季節となりましたが、如何お過ごしでございましょうか。小生も営業コンサルタント？情報仲介業！或いは「一人商社」！？として独立して2年。どうなることかと思いましたが、お陰様でどうにか生きて「余生」を楽しませていただいています。よくこんなものを恥ずかし気もなくと、毎回少しは恥ずかしく思いながら送り続けて18号にもなってしまいました。反面教師にでもしていただければ幸いです。

ところで、東大三鷹寮の寮生諸君の間では干場さんは総会屋じゃないかとの噂も流れたりするようですが、社員持株会で購入した株が下がりっ放しなのでミサワホームの株主総会に出席してミサワパンヤリゾート等子会社の経営状態、不良債権処理策などについて一度発言しようかと誘惑に駆られます。柳沢伯夫金融再生担当相（S32年入寮）の奮闘もあって金融危機も一息つき、株価も少し戻して来ましたが、まだ含み損を沢山抱えた株を持って、同じ思いを抱く方は多いのではないのでしょうか。それに、関係することの多い建設業界でもこの3月の決算で国から資本注入してもらった銀行から債務免除を受けたゼネコンがいくつかありますが、半分になったとは言え毎年の営業利益ではとても返し切れない膨大な債務が残り、流通業や商社の抱える債務も巨額です。まだ一波乱、二波乱あるような気がしますがお互い元気に頑張りたいものです。

◎失業の淵から

大企業の破綻が続き、多くのサラリーマンが職を失って巷に投げ出され、失業率も5%近くなつた昨今、新しい会社の立ち上げに失敗し路頭に迷いかけた者としては身につまされる。学生時代は職業革命家を志し現世的な名誉や幸福と無縁な立場から出発した者にしてあの頃は、「干場さん元気がないですね」と言われるくらい精彩を欠いていたので、会社の発展と終身雇用を信じここまで順調に勤労生活を続けて来た方々には同情を禁じえない。勿論、会社が立ち行かなくなつて職を失うのと、勝手に前職をやめて新規事業の立ち上げに失敗するのと同じではないが、生活の糧を失うという点で違うところはない。

それで私も一時途方にくれた。一度経験しようとして40才で始めたサラリーマンを十年勤めたが専門の知識や技術を得た訳ではない。そんな50過ぎのズブの素人を雇う会社があるか。いい条件で働かせてもらえるか。同窓会やらの好きな世話役活動をやる時間的、精神的余裕を作れるか。確かに大学と寮に長くいて、寮活動や学生運動等で一般の東大卒の人間にはない類い稀な人脈を培ったらしく会社にも随分貢献したが、高橋カーテンウオーの高橋社長の様にそれを評価して同窓会活動でも何でもやりなさいと言ってくれるか。又、トップの理解があつても会社の中で一人だけ異質な“公私混同”の活動を続けるのもつらい。他方独立して営業コンサルタントのような仕事を始めるとして顧客がつくか。当座の活動費までもらえるか。手に入るのが何年も先になるような成功報酬だけではそれまでに飢え死にしてしまう。かつて革命家を志し、大義のためには何時死んでもいいと覚悟した者が、老後の蓄えにと爪に灯をともしように金を貯めたりはできない。稼いだ金もあらかたはアルコールとして口から入り、小便となつて大地に戻った。わずかな蓄えも会社の立ち上げに失敗して消えた。残っているのは大枚の住宅ローンだけだ。

だがものは考えようだ。かつて日本ビクターの高橋英雄先輩（S34年入寮）からお前は人脈も豊富だし、営業マインドもあるからビクターの営業も手伝えと言われ、新宿の先の

初台にあるレイルシティ初台（現カシオ本社）のPCカーテンウォール（工場生産の高層ビル用コンクリート製外壁）の営業のついでに、テレビ会議のシステム等ビクターの製品を納入するのを手伝ったことがある。残念ながら本業のカーテンウォールの方は元請けの大成建設と金額の折り合いがつかず不調だったが、何時か営業コンサルタントとして独立できたらいいなと考えたことを思い出す。その時は本業の傍ら他にクライアントを増やしてスムーズに独立するなんて、調子よく行く筈がないと諦めてしまったが、全てを失いスムーズな移行など不可能になってしまった今こそチャンスではないか。それに学生時代、昼は駒場のキャンパスで、夜は三鷹の寮でオルグ活動に明け暮れ、機関紙の赤光も毎号2百部以上売り、売り上げ？トップを誇っていた。オルグは要するに革命党派の営業ではないか、営業の才も多少はあるんだ。無理にこじつけ気持ちを奮い立たせる。

しかし、明日からどうやって食べて行くか。当座の活動費も出してくれるクライアントを探す必要がある。まずは実績のあるところからと高橋カーテンウォールの高橋社長に相談する。ありがたいことに窮状を察してか、月々まとまったお金を出してくれる。ビクターからもOKが出る。干場の奴困っているらしいと噂でも広まったか、かつての日大全共闘の一之瀬君からは関係するソイル工業の土木資材の販売協力の申出があり、駒場の中国語クラスの2年下の青沼君からも新薬の臨床治験の仕事を誘われ、それぞれまとまったお金をもらえることになりどうにか一息つく。順境で無理に思えたものを逆境が可能にしてくれる。だが、取り敢えず当座の活動費をいただくとそれに見合った成果を上げなければいけない。背中にクライアントのプレッシャーを感じ、先輩や友人諸兄の後押しを得てようやく、アマダイ（Tile Fish）は再びNetworkの大海を泳ぎ始める。

◎ 旦那の多いお妻さん

ようやく旗揚げした「TF Network」であるが、甘鯛（Tile Fish）には棲家も必要だ。携帯電話1本のホームレスでは相手にされない。アシスタントは別にして、一人でしかやりようのない仕事なので我が家が事務所でもいいのだが、できれば都心に欲しい。幸い、三鷹寮と学生運動の両方で先輩の大橋憲三氏（38年入寮）が関係する教育ソフトやシステム開発のラティオインターナショナルの本郷の事務所に机を一つ貸してもらおう。コピーとファックスも使わせてもらい、留守中の電話も受けてもらおう。こうしてどうにか態勢が整い活動を始めて2年。ボチボチ成果も上がり、クライアントも少しずつ増える。片手では数えられない。例えは悪いが、「旦那の多いお妻さん」だと変なことを考える。そして、妻といえはお玉さんだと、鵜飼の「雁」を思い出す。お玉さんが高利貸しに囲われていた無縁坂も同じ本郷界限だ。一人旦那のお玉さんは結局医学生の岡田に対する一途な思いを遂げることができなかったが、旦那が沢山いれば岡田にもっと積極的に自分の思いをぶつけることができた筈。毎晩違う旦那を迎えそれぞれに満足させなければいけないのはとても気を遣うが、その分、独立性と行動の自由は確保できる。

お玉さんのように旦那が一人だと、景気が悪くなると手当てを減らされたり、倒産で手当てがなくなり路頭に迷う。だが何人もの旦那を見つけるのはそれなりの魅力が必要だし気も遣うが、景気が悪くなっても直ぐ生活に困りはしない。複数の旦那という窓を通し色々勉強もでき、スキルも磨ける。会社勤めと複数の顧客を持ち自営するのとの違いに通じないか。本来なら危険分散のシステムとして寄らば大樹の陰の働きをする会社だが、全部の部門が立ち行かない、調子のいい事業部だけでは他の部門を支えきれない未曾有のデフ

レ経済になると、旦那が一人しかいないサラリーマンは即、リストラや倒産の危険にさらされる。寄らば大樹の陰が何のことはない単なるもたれ合いにしかなくなってしまったら、旦那の多いお妻さんの方がまだましではないか。

もっとも旦那が一人しかなくとも一般に通じる魅力があれば旦那の調子が悪くなっても直ぐ新しい旦那が現れ路頭に迷う心配もない。長銀が潰れたので一緒に団塊ネットの世話人をしている長銀総研の荒岡君はどうするのだろうと少しは心配したのだが、心配しただけ損だった。引き止められたにも拘らずパソナグループ入りした長銀総研にとどまることをいさぎよしとせず、さっさと機械振興協会の研究主幹のポストを得て転職した。幅広いネットワークと専門的な知識、経験の豊かさの賜物か。日債銀のK君や日本国土開発のY君など、立ち行かなくなった会社に籍を置く友人の顔が幾つか思い浮かぶが、それぞれに頑張っている。ピンチはチャンスでもあるから。

◎ 自家用車操るホームレス

先日京都、大津、名古屋そして岐阜と2日ばかりで出張した。滋賀と岐阜の県警本部建替え計画があり、名古屋大学の医学部の新しい研究棟もPCカーテンウォール（工場生産の高層ビル用コンクリート製外壁）を使うので、滋賀と岐阜の県警本部長、名古屋大学の事務局長、施設部長に挨拶方々PRにお伺いする。それに岐阜では久しぶりに三鷹寮同期の森元副知事を訪ね、そろそろ自治省に帰っても居場所がないから岐阜に居つくんじゃないのと軽口を叩きながら県の施設計画なども聞く。名古屋では新任の中部地建の営繕部長にも挨拶。京都経由で大津から名古屋を案通りして岐阜に行き、名古屋の真ん中の栄のホテルで靴を脱ぐ。勿論その前に、刺身は岐阜にかなわないとのクライアントの一言に、さすが名古屋コーチンの町となぜか納得して焼鳥をご馳走になる。思えば岐阜は川魚がうまいところとは知っているが、魚は海に近い名古屋が美味しい筈。これは次回森元副知事に柳ヶ瀬の味所を案内してもらってぜひ確かめたいところだ。

翌日夜明けとともに目をさます。服だけ脱いでそのまま寝てしまったことに初めて気づきシャワーを浴びる。ポットで湯を沸かしお茶を飲み、昨日読み切れなかった日経新聞に目を通すが朝食までまだ間がある。いつものように、散歩しながら新緑の公園のベンチで読もうと東京駅で買った雑誌を手にしてホテルを出る。メインストリートの久屋大通りは真ん中を幅広いグリーンベルトが走り公園になっている。適当な場所をさがして腰を落ち着ける。雑誌を広げて目を凝らすと広場の周りはブルーシートで囲まれている。ホームレスのホームという訳だ。これでさわやかな朝の空気を吸いながら読書を楽しもうというロマンチックな気分は失せ、失業率が上がったからなど現実に戻る。気分が乗らないのでコーヒーでも飲みながら読もうと喫茶店を探すが名古屋一の繁華街の栄を一区画回ってもまだやっている店がない。仕方なく元に戻り雑誌を読む。よく見るとホームレスホームの前には1台ずつ自転車がおいてある。東京では見かけない光景だ。さすがトヨタの地元、モータリゼーションの名古屋だ。ホームレスも自家用車を持っていると感心する。心なしか東京のホームレスよりも小綺麗だ。名古屋大学と中部地建での挨拶を終えて昼食後、栄の交差点の角、東京でいえば数寄屋橋の交差点に面した中日ビルの2階の角の窓際で食後のコーヒーをご馳走になっていると、信号が青になって歩き出した半袖姿も混じる歩行者の後ろから、季節遅れのスタジアムジャンパーを着た若者が自転車を走らせて来る。見れば体が痒いのだろうか、ジャンパーの上から体を掻き回している。

◎加茂の河原に

予て営業中の札幌NTT病院が起工し翌週札幌に飛ぶ。干場寮委員会の副委員長のNTTインターナショナル宮脇取締役が本社会長秘書の時に一緒に仕事をしていた病院の荒谷事務長に再度挨拶。寮同期の関西ドコモの剣持取締役が前職のNTTリビングで一緒に設計・監理のNTTファシリティーズの宮脇札幌支店長にも再会。翌日寮で1年先輩の堀口NTT札幌支店長と昔話に花を咲かせる。札幌でも年のせいかホテルで早く目を覚まし、ライラックの花咲く大通り公園を散歩する。チューリップ、八重桜等も一斉に花開き気分がいい。ホームレスもほとんどいない。ましてブルーシートのホームレスホームなどはない。同じ大通り公園とは言っても名古屋とは大違いである。

その翌週は緑の地球ネットワークの高見君と大阪で読売テレビの青山名誉会長と2時間ほど話し込んだ後、慌てて京都大学に秋田弁を巧みに操る藤井企画調整官をたずね、夜は地元の先輩に先斗町を案内してもらう。司馬遼太郎なども常連だったという小料理屋で旬のハモなどご馳走になる。翌朝5時過ぎに目を覚ます。新聞や雑誌やらを持ち高瀬川を上流に歩いて鴨川に出、賀茂の河原を下る。どこかベンチにでも腰を下ろし雑誌でも読もうと見渡すと、河原のあちこちに浮浪者がいる。見ると二条大橋の下にも、三条大橋にも、橋という橋の袂にはホームレスが立派なホームを構えている。出雲の阿国の昔から、連綿と橋の下に居を構える者がいたのだ。これが本物の「河原乞食」だと、しばし感無量。

◎3周遅れのトップランナーと

東大三鷹クラブの24回講演会は3月14日に大阪で緑の地球ネットワーク(GEN)高見邦雄事務局長(S41年入寮)を講師に、黄土高原緑化の意義と最新中国事情を聞く。JRの大阪弥生会館でこれが3度目。講演の前にJR西日本の南谷社長(S35年入寮)に高見君と二人で挨拶。併せて写真家橋本紘二氏の黄土高原の写真集出版の際に京都駅ビル等で写真展を開催できるように協力依頼。今回の講演を期に南谷先輩、同じJR西日本の池上常務(S39年入寮)や阪和興業の北社長(S37年入寮)など数名の方々にGENに入会していただく。又、毎度社長の手を煩わせる必要もないから来年の講演会は俺に相談に來いと池上先輩の頼もしいお言葉のついでに、5千円の会費のところ最低3千5百円の弁当では会場費とビール1本で足が出てしまうし、ロートルには豪華弁当は食べきれないのでもっと質素で安い弁当を用意していただけないかと、さっそく願います。

ところで高見君が植林のため黄土高原に初めて足を踏み入れたのは92年。日本の1.5倍以上の面積の半砂漠地帯を徒手空拳で緑の地にしようとの無謀な試み。しかし、熱意が人を動かし、人々はいつの間にか隊列をなし、一隊が二隊になり、7年間に2千8百haの土地に805万本の苗木を植え、30以上の小学校に付属果樹園を作り、8haの育苗園と86haの植物園等を擁し、20人ほどの現地スタッフが常勤するまでになる。まさに「愚公山を移す」の趣き。ついに素性の怪しい「旦那の多いお妻さん」も、「岡田」を彼の地に失ってから胸にぽっかり空いた穴を埋めるもう一人の「岡田」が現れたのかも知れないと胸が高鳴る。それまで「毛沢東思想学院」の名で日中友好運動をしていた時は何たるアナクロと冷やかにみていたのに、3周遅れとはいえ今や時代のトップランナー。宮崎滔天のような大陸浪人が現代にもいていいじゃないか、自分も伴走者たらんと思ひ始める。幸いお玉さんと違い私には複数の旦那がいる。世間は身持ちの悪い女と後指差すが、彼女と違い私はちっとは自由だ。日陰の身もたまには表で光を浴びたい。ついに裏はアマダイ

(Tile Fish) Networkそのまま表はGENアドバイザーリースタッフなる緑色の名刺を自費で作し、大陸にいる高見君の代理でKDDの国際協力助成金の授与式に出る。そしてあろうことか、日本財団(船舶振興会)で高見君を西沢専務理事(S34年入寮)に紹介して助成をお願いし、経団連から誘われて中国での植林のノウハウを伝授する高見君に同行する。かってそれぞれ悪の巢窟や資本主義の総本山と攻撃した笹川財団や経団連に乗り込むとはと二人で苦笑い。もっとも経団連で応対してくれた国際本部長の島本明憲さんは駒場の中国語クラスの先輩(38年入学)。しばしローカルな話に花を咲かせ、世間の狭さを痛感。これで昼日陰者が余りしゃしゃり出ると直ぐお里が知れてしまう。用心用心。

◎中国、3度目の出会い

GENの運動をあちこち持ち回るとなると、自分も一度現地で植樹しない訳にはいかない。そこでこの3月末のワーキングツアーに参加する。思えば、大学入学の時に第2外国語に中国語を選択したのが中国との最初の出会。プロシャの法に範をとることの多い日本の法律なのでドイツ語を選択する者が圧倒的に多いが、実用一辺倒の功利主義的な選択は純な若者に似合わない。それにおしゃれなフランス語は田舎者の自分にはふさわしくない。それでその何たるかを知らぬまま中国語を選択した。これが中国との最初の出会であり、人生の躰の始まりだった。ひどい音痴の私には四声(中国語の発音)の区別が全くつかず、従って授業は理解不可能で苦痛以外の何物でもない。おまけに語学にひどいコンプレックスを持つようになった。

授業には余り出ず寮で本を読んだり議論したりすることの多かった劣等生が、学生運動を始めるのに余り時間はかからなかった。世の中に少数の金持ちと圧倒的な貧乏人がいるとわかって、この世の中が資本家階級と労働者階級の相対峙する階級社会だとの意識はなかった。しかし知った以上、若者はそこに身を置き育った圧倒的な貧乏人の側につくことを躊躇しなかった。だが、労働者の味方を標榜する社会党や共産党が支持するソ連や中国が理想の社会主義社会だとは思えなかった。その時、大陸で文化大革命の嵐が吹き始める。「人間の魂にふれる！」永続革命路線は若者の心を激しく掴んだ。これが中国との2度目の出会いだった。人間の性は善なるもので永続革命によって変えられる！迷いが吹っ切れた若者は突っ走る。未決で足掛け3年拘留された中野刑務所を出た頃、中国政府が毎年親中国派の日本人学生を中国に招待し私にも団長で声が掛かったが、一審実刑でまだ裁判中の身には日本政府から渡航の許可が下りなかった。

久し振りに戻った祭りの後のキャンパスには分裂と内ゲバと、極端な軍事路線しか残らず、長い空白の後で身を置く場所を見つけることは難しかった。2度目の挫折。後の十年はどうにも力が入らず、何もしないことが為すべきことのように思えた。悪いことに高度成長後の日本では豊かな中間層が輩出し、司法試験を受けると称して塾や予備校で教えていれば食べることはできた。総括は先延ばしされた。そして中国からは文化大革命と毛沢東の否定的評価が聞こえて来る。理想と現実のギャップ。在るべき人間像とまさにある人間と。まさにある人間の中で学ぼう。40歳にして普通のサラリーマンに。そして「毛沢東思想」の旗を「環境」に変えた高見君との再度の出会いから中国との3度目の出会いへ。在るべき中国から今まさにある中国との出会いへ。

◎地球大のトイレで

高層ビルの林立する北京から久し振りの寝台車で西へ3百キロ。懐かしい石炭の匂いのする、埃だらけの大同へ。露店の物売りの声がこだまする薄汚れた中層ビルの並ぶ大同をバスで抜けると見渡す限り黄土色の世界が広がる。ポツンポツンと鋤を持ち畑を耕す農民。1～2時間走るとはげ山が見えて来る。もうもうと土煙を上げて走るバスの両側に深く切り立った浸食崖が続き、地平線の向こうまで段々に耕されている。遠くから見るとそれとは分かりにくい土壁と土の屋根の家の集落でバスは止まり、浸食崖に段を切らたところに擦り切れ、つぎを当てた綿入れの人民服の農民と手分けして松の苗を植える。

1時間ほどの作業で昼食だ。1人当たり年間所得8千円、1日2食の食器もろくに無い極貧の農家で、十皿ほど目の前に並べられても申し訳ない気持ちが先立ち。材料は自分達が用意したし、残るとその家のご馳走になるのだから気にせず食べろと高見君は言ふ。食べると出したくなる。庭の隅に土塀で囲った一角があり縦横3mほどの深い穴があって、丸太を数本渡してある。これが高見君言うところの地球大のトイレだ！丸太棒を跨いで尻を出す。さわやかな春の風が尻をなでて行く。三国志の昔からこの地の人々はこうやって生きて来たのだ。ふと青い空を見上げると、白い飛行機雲がぐんぐん伸びている。

◎第3回復活寮祭のご案内

東大三鷹国際学生宿舎に衣替えしてから途絶えていた寮祭ですが3年前にようやく復活。加藤登紀子さんに無料出演していただき華やかに開催されたのですが、翌年はお休み。もう駄目かと思っていたら昨年、手作りの身の丈サイズで再度復活。今年は駒場祭と重なる秋を避けこの6月27日(日)に開催の運びとなる。来日ウン十年の宣教師バンド「ハート・トゥ・ハート」(金髪美女のお嬢さんボーカル付き・・・去年はそうでした)のコンサート、留学生や学内サークルによる民族芸能、そしてメインゲストの国際政治学者舛添要一氏による講演、屋外でのフリーマーケット、屋台と盛り沢山のプログラムです。

かつてのゴミに埋もれたタコ部屋の自治寮から体のいいワンルームマンションへ。すっかり様変わりした三鷹寮ですが、孤立を嘆きながらも連帯を求める若者に拍手を送りたいと思います。伝統も経験も一度途絶えて何も無いところから、あらためて自治を築いて行く経験は彼等にとって大きな財産となるでしょう。それに3百人の男子寮から男女6百人、約3分の1が20数か国からの留学生という国際学生寮。連帯の輪は全世界に広がります。固い絆と自治の経験、進取の気性とグローバルなネットワークが彼等を新しい時代の担い手に育てていくでしょう。この機会に我々OBも一度顔を出して若き日を偲び、次代を担う学生と、三鷹から再び世界に羽ばたいて行く各国の若者たちとグラスを傾け交流し、共に楽しもうではありませんか。

◆6月27日(日)のスケジュール

★10:00～フリーマーケット、屋台開店(諸国料理、民芸品)

★11:00～12:00 ハート・トゥ・ハート

フィリップとジェームスの二人の宣教師によるバンド。去年はカントリーウエスタン、ポップス、ロックンロール、フォークソング、懐かしい映画主題歌、パレードと盛り沢山。秋田音頭まで飛び出して、秋田県人の私はびりくりじまじだ。

ジェームスのお嬢さんがボーカルで参加し、これが目の覚めるような美人。今年も目の保養ができることを楽しみにしています。宣教師さん御免なさい？！

★13:00～15:00 講演「学生時代に学ぶべきこと」

国際政治学者舛添要一氏（S42年入寮）

都知事選で惜しくも敗れた舛添君ですが、有力候補7人中6人は東大出身。たった一人の一橋大に敗れたが、合わせた票数では圧倒。学生時代に団結することを学んでおけばこんな事態は避けることができた?! 本人はどう総括するかわかりませんが、学生諸君が聞きたいテーマは「学生時代に学ぶべきこと」と、とても真面目。

★15:00～18:00 民族芸能

★19:00～ 打ち上げ懇親パーティ（OBも自由に参加を!）

◎地球環境とNPOのこれから

金融問題を巡る第一回連続講座に続いて、NPO（特定非営利法人）新法が成立後のNGO（非政府組織）の活動の現状とこれからについて、中国の半砂漠地帯の黄土高原の緑化運動を進める「緑の地球ネットワーク」の実際の活動やNPO先進県宮城県の取り組み、国政の動きを通じて、検証し、提言して行きたいと思います。

期間中会場では、写真家の橋本紘二氏による黄土高原の写真展も併催します。又、緑の地球ネットワークによる黄土高原緑化活動のビデオも放映します。

会場 ライブハウス「トーキングモンキーズ」(別図参照)

会費 2千円(ワンドリンク付き)

主催 団塊政策研究ネットワーク

協力 緑の地球ネットワーク、トーキングモンキーズ

★第1回 “NGOとNPO、そして黄土高原緑化”

日時 7月2日(金) PM7時～

講師 高見 邦雄(緑の地球ネットワーク事務局長)

挨拶 橋本 紘二(写真家)

★第2回 “NGOからNPOへ、その可能性”

日時 7月6日(火) PM7時～

講師 浅野 史郎(宮城県知事)

★第3回 “黄土高原の歴史と緑化の意義”

日時 7月10日(土) PM5時～

講師 上田 信(立教大学教授・緑の地球ネットワーク世話人)

★第4回 “黄土高原緑化から緑の地球へ”

日時 7月19日(月) PM7時～

講師 桜井 尚武(林野庁研究普及課首席研究企画官、S40年入寮)

★第5回 “地球環境とNPOのこれから”

日時 7月23日(金) PM7時～

講師 小島 敏郎(環境庁長官官房総務課長、S43年入寮)

◎老人力で町おこし! 勝手に応援だ!ん? 宣言・・・その6

トーキングモンキーズでは自治省の外郭団体ふるさと情報プラザと協同のTMふるさとシリーズ4回目を6月21日(月)～26日(土)の日程で開催します。今回の舞台は史

